
緋弾のアリア～薬学科の武偵～

緋村 梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア～薬学科の武偵～

【Zコード】

Z4352Z

【作者名】

緋村 梢

【あらすじ】

東京武偵高校に新たに増設された学科「メティシン薬学科」。

元々、国家試験である薬物取扱者資格を取得できる「東京薬物専門高校」¹という高校があった。

だが、少子化による生徒減少により経営が困難となり、国立である武偵高と統合することとなつた。

薬専高に通っていたく姫神^{ひめがみ}薰^{かおる}（17）もまた例外ではない。

薬の所得済みの資格は危険物取扱全種、薬剤師、有機溶剤作業主任者、麻薬取扱者、毒物劇物取扱責任者等を所有している。

というか、学校が強制で取らせるのだが・・・。

そんな普通の高校生活からかなりかけ離れた薰は、これからもつと普通の高校生からかけ離れるとは、夢にも思っていなかつた・・・。

＜作者メッセージ＞

こんにちは、私は国語力・文章力などの小説に必要な要素が欠けています。

ですが、私は自分のできる限りの力を出し切つて書きたいと思うので、目を瞑つてください。

1弾 Prologue

とある日、俺は引越し屋のトラックに揺られながら、眠っていた。
今年から俺は東京武偵高校に新設された学科・・・メディシン「薬物科」に所属することになった。

そうなつた理由は、少子化により 全校生徒数が800人から一気に290人に減つたからだ。

それもそのはず、今年入る予定の一年生は、18人で、今年卒業したのは、500人、在校生はたつた290・・・。

それに新入生を足しても、308人・・・。

少なすぎる・・・。

それに、今在校している生徒のには海外の研究機関に行く者もいる。

その為、大体在校生は200人居るかいないか・・・。

3年は120人、2年は俺を含め、62人、1年は18人となつた。

その為、経済的な余裕がなくなつて、廃校となつた・・・。

だが、武偵局の計らいで、武偵高と統合するとなつた・・・。

さすが、校長の人脈・・・。

その人脈を生徒集めには役立てんのかね……。

俺はそう考えていた。

すると、トラックは停まつた。

「着いたぞ、ガキ」

「見りやわかるつて……」

俺はそう呟いて、トラックから降りた。

しかし・・・・、薬専校の寮よりきれいだな・・・・。

「おひーーさつあと運べよーー

ちまちまつむせい奴だな・・・・。

「分かつてゐつて・・・・

俺は渋々、荷物を運ぶ。

運ぶと言つても、アタッショケース×8と実験用具セツト、白衣と私服だ。

そんなに数は無いが、アタッショケースは一つ10kgある。

俺はそんなアタッショケースを4つ同時に持つて、今日から住まつ部屋に運んだ。

部屋は遠山つてこつ人の隣だ。

すべての荷物を運び終え、運送業の男性を見送りこ、外に出た。

「んじゃあ、達者で暮らせよ」

「言われなくとも分かってますつて・・・」

「しかしあ・・・、なんでお前は行かなかつたんだ?」

「何にだよ?」

「寮だよ、寮。折角、校長が学校の土地を売り払つて、買つてくれたんだからよ。ちつたあ校長の恩も着ろよな」

「んな」とつたら、校長に迷惑掛けつ放しになんだろ・・・」

「やうだな・・・」

「また何かあつたら連絡するよ

俺がそつういつと、男性は「おつ」おつと書いて去つて行った。

さてと、俺も部屋の片づけするかな・・・。

俺はそつ考え、部屋に戻つた。

部屋に戻り、俺はアタッショケースをクローゼットに入れた。

そして、ある程度、部屋を片付けたあと、チャイムが鳴った。

俺は時計を見た。

時刻はPM1・29を回っていた。

確か武偵高説明会はPM2・30からであつたよつた氣がする。
てことは、恐らく・・・・

俺はそう考えつつ、玄関を開けた。

そこには、セーラー姿の少女が居た。

「よつ、春風。何の用だ？」

「おつづく。今日は薫が来る日つて聞いてたから、来てみたの。そ
してついでに、いつしょに武偵高に
行かない？」

「別にいいや。すぐ着替えるから待つてね」

俺はそつと残し、リビングで着替えを済ませ、学ランを着る。

東京薬物専門学校は学ランである。

女子はセーラー服。

まあ、これを着るのは今日が最後だつ。

説明会の時に制服の採寸もするって言つてるしな・・・。

そして、俺は玄関に出て、春風と共に武徳高に向かつた。

武徳高に到着し、体育館に入った。

すでにほとんどの生徒が集まっていた。

俺は自分の学年のところの椅子に座った。

周りの奴はみんな顔見知りだ。

といつても、当たり前なことなのだが・・・・。

そして、説明が始まった。

この武徳高では、^{メディシン}「薬物科」は、衛生学部になるらしい。

薬物高では、全員が薬剤師の資格を取得しているため、納得できるのだが、劇毒物を扱う奴は少し頭を捻るだろ?。

まあ、俺はどうでもいいんだが・・・・。

その後、制服の採寸をして、設備説明を受けた。

その途中・・・・・迷つた・・・・・。

俺と春風、それに俺の親友である、倉木雪弥（くらき ゆきや）（17）、春風の親友である、姫川（ひめがわ）（あゆみ）（17）・・・・・。

「なんで迷つたんだ？薰」

「なんでだらうな・・・・・、雪弥」

「そんなの決まつてゐじやない・・・・・」

「これはもうちらん・・・・・」

「・・・・・雪弥が興味本位で廻り過ぎーーー。」

俺と春風、愛美はハモつた。

「全部俺のせいかよーーー！」

「・・・・・それしかねえだろーーー。」

俺達がやつこつと、雪弥はしょぼんとした。

「わひと、これからどうあるの？薰」

「感でいくしかねえだろ・・・・・」

俺は適当に、歩く。

すると、クロロベンゼンの香りがした。

恐らく、メテイシン薬物科の学科塔が近いのだろう。

俺はそういうふうに、香りを追つた・・・・・。

1弾 Prologue (後書き)

姫神 薫 (17)

髪：漆黒のナチュラルスイーニングショート

眼色：ダークブルー

身長：172 cm

所属：薬学科2年

春風 詩穂 (17)

髪：漆黒のロングヘア

眼色：エメラルドグリーン

身長：155 cm B：B70

所属：薬学科

倉木 雪弥 (17)

髪型：濃い茶色のマッシュカット

眼色：ダークグリーン

身長：170 cm

所属：薬学科

姫川 愛美 (17)

髪型：黒色のセミロングのストレート

眼色：ダークブルー

身長：153 cm B：A60

所属：薬学科

2弾 Second Prologue

香りを辿ると、「KEEP OUT」「HAZARD AREA」と書かれたテープで仕切られている建物に到着した。

その建物の付近には防護服を着た人が10名ほど居た。

入口のあたりに、有毒を記す絵が描かれたトラックが一台居た。
そのトラックの荷台から、防護服を着て、フォークリフトを運転している人が、何かを運び出した。

「ありやなんだ？」

「薬物科なら自分で考えろ」

俺は雪弥が聞いてきたため、そう返す。

目を凝らして、トラックに書かれた文字を見た。

そこには「トリクロルエチレン」と書かれていた。

「…………やつをどこから離れるが」

俺は振り返り、その場を離れた

「お、おい！」

雪弥は慌ててついてきた。

「もちろん、春風と愛美もついてくる。

「一体どうしたの？」薰

「お前も自分で考える」

「ケチくさいなー、教えてよー」

俺は立ち上り、振り向く。

「仕方ねえな・・・。ありやトロクロル工チレンだ。それも高濃度のな

俺がそうこうと、3人は驚いた表情をする。

「おーおー・・・なんでそんなもんがあんだよ・・・？」

「俺が知るか。恐らく、劇毒物取扱関係だろ。それより、早く合流しないと・・・」

俺は携帯を取り出す。

すると、3件ほど着信があった。

「風宮からだ」

「風宮から? なんでお前が風宮の携番知つてんだよ?」

「別にいいだろ。それより、電話してみないとな・・・」

俺は風呂に電話をかける。

『おー、やつと繋がった。お前、どうして連絡なんだよ?』

「悪い、恐らく薬物科塔から西に500㍍のところだと繋がるよ。」

『もう薬物科塔に行つたのか!?』

「ああ、お前らも行つただろ?」

『それがよ、今は立ち入り禁止らしいんだ。なんか劇薬を納庫して
るらしくてな』

「それなら見たぞ」

『本当か!? で、薬品はなんだ?』

「トリクロルエチレンだ。それも高濃度のな

『おいおい・・・・・マジかよ・・・・お前らよくそんなとこ行けた
な・・・・もし俺がお前らだつたら
逃げ出すつての・・・』

「俺達も逃げてきたところなんだよ。高濃度のトリクロルエチレン
つつつたら、毒分類だからな。それよりお前らビコニんだよ? そつ
ちと合流すつからよ」

『ああ、二二二は確か・・・・・強襲科実習場・・・・・次は救護科
の学

科塔に行く予定だ』

「分かった。なら俺達は救護科アンジュラスの学科塔に直接向かつ。案内人には伝えといてくれ」

『了解。んじやあな』

そう言つて、風宮は通話を切つた。

「わひと・・・」

俺はポケットから地図を取り出し、開く・

今俺達が居るところから救護科アンジュラスの学科塔まではそれほど離れては居ない。

「んじやあ行くか」

「じゃあ俺が先頭を・・・」

雪弥がそういうと、空気が重くなつた。

「・・・やっぱ薰が先頭でしょ」

「そうだね」

「おこ・・・なんで俺じやダメなんだよ・・・?」

「デジヤブを見たからよ」

春風がそうこうと、愛美が相槌を打つた。

「んなどうでもいいからねとあことひと合流するだ

俺はそう言って、歩き始めた。

数分後、俺達は救護科学科塔アンビュラスに到着した。

「まだあいつ等は来てないつか・・・」

「まああいつらが先に来れるつて保証はねえし。それに、あいつらは強襲科アサルトの学科塔から

来るつて言つてたからもう少しかかるだろつ」

「そんなに遠いのか?」

「約0・9kmだ。まあ気長に待といつや」

俺はそう言って、近くのベンチに腰掛け、上を見る。

木陰が涼しいな。

すると、隣に春風が座つた。

「薰、どうして寮に来なかつたの?」

「どうしてつて・・・・・」

「そうだぞ。お前が居ねえから春風がさみ……」

雪弥が何か言おうとした瞬間、春風がボディーブローを食らわした。

「お、お、お……」

「何でもないって、ねえ? ゆ・せ・やー。」

そう言つて、春風……怖……。

「あ……ああ……」

雪弥は苦しそうに腰を押さえて言ひ。

「や、そつか。発言はなまえをつけよ。」

「そうある……」

「で、なんで校長の用意してくれたマンションに入らなかつたの?」

「それは……、校長に迷惑をかけたくないからで……」

なんだか苦しい逃げ方だな……。

「ふーん……。でも、薫のために一か所だけ部屋が空いてるんだ
けど……。」

「ああ、あの部屋は後輩にでも使わせてやつてくれ。俺はあそこに入
る気は始めるからな」

「わかった。でももし、来たくなつたら、事前連絡してね。そん時は部屋のあて、探すから」

「そん時は頼むな」

そんな話をしていると、風宮達がやつと来た。

その後、いろいろな説明を聞いて、寮に戻つた・・・・・。

寮に帰り、俺は学ランを脱いで、段ボールに畳んで直した。

「もひ・・・使わないからな・・・・・」

俺はそう呟いて、私服に着替え、制服とズボンを洗濯機にかけ、寝室のベッドに倒れた。

武慎高の制服は明日には届くらしいしな・・・・。

あと、銃刀所持が校則で決まつていて、俺は無難にベレッタM8000という銃とW2鋼という素材を使ったバタフライナイフを頼んだ。

てか、薬物を扱ううえで、火気は厳禁だ。

だから、銃には恐らく弾は込めない。

でも、そしたら意味ないか・・・。

俺はそう思いつつ、眠りに就いた・・・。

翌日・・・・・

早くも小包として制服と銃刀が届いた。
銃刀には、ホルスターという装備のための収納アイテムが付いてきた。

俺は試しに制服を着て、武装してみる。

我ながら、様になつてゐる事に驚いた・・・・。

つてこんなことつてゐる場合ぢやねえ。

俺は急いでスースに着替えて、部屋を出た。

寮の下にはタクシーが停まつていた。

俺はそのタクシーに乗り込む。

そして俺を乗せたタクシーは走り出した。

今日は、青森まで里帰りだ。

ざつやう、俺のことを星伽神社に紹介したいらしい。

まあ、父さんと母さんは星伽の専属薬剤師だからな・・・。

後継ぎの俺を紹介したいのも無理は無いつか・・・。

しばらくして、タクシーは成田空港に到着した。

料金を払い、手ぶらで空港に入り、チケットを買って、機内に向かつた。

俺はそこまで金持ちでもないため、エコノミーに座った。

それも格安で訳ありの奴をな・・・・。

俺はそう思いつつ、外を眺めた。

成田空港から青森空港までは約2時間弱掛かる。

だから、それまでは暇なのである。

そういうえば、里帰りするのって今回が初めてだ。

初めてというか、去年、日本唯一の薬物専門の学校である東京薬物専門高校に入学するために上京してきた。

だがその学校も一年経つて廃校になつた・・・・。

何のために俺は東京に来たんだか・・・・。

ハア・・・・、下手したら帰つて来いつて言われるんだろうな・・・。

。 。 。

嗚呼・・・、なんだかそう考えたら帰りたくないなってきた・・・。

しかし、もう乗つしまつた・・・。

あつち行つたら、恐らく迎えが来てるからエスケープ不可だ。

あの一人・・・・元気にしてつかな・・・

そして・・・・青森空港に到着した。

手ぶらのため、荷物を取りに行くこともせず、出口を出た。

相変わらずつてところかな・・・。

俺はそう思いつつ、タクシー乗り場に向かつた。

タクシー乗り場に着くと、がらんとしていた。

「全然いねえし・・・・。なんでだ・・・・? しゃあねえ・・・・、歩いて行ける所まで行くかな」

俺はそう呟いて、歩き出した。

まあ東京より少しだけ、自然が多いくらいだ。

俺はそう思いつつ、歩いていると、黒塗りのプリウス が田の前に停まつた。

「よつ、薫

車の窓から顔を出して、言つて来た男性・・・・。

俺の父さんである姫神 彰あきひらである。

奥にはにっこりと微笑む女性・・・・・。

俺の母さんである姫神 郁いくである。

「なんで今なんだよ・・・・」

「悪い悪い。ちょっと道が混んでてな

「まあいいけど」

俺はそう言って、車に乗り込んだ。

「で、話は変わるけど、薬専高が廃校になつたつて本当?」

母さんは後ろを振り向いて俺に問いかけてくる。

「ああ。だけど、東京武徳高に新設された薬物科メティシンに全員移動になつた。だから、今まで通りだつて」

「それならいいんだけど……」「

「やついえば、星伽家の長女が東京武蔵高に居るらしい。まあ縁あつたら仲良くしてくれよ」

「はいはい、縁があつたらね」

俺はそう答えて、外を眺めた。

しまじく走ること、約40分…………。

俺の実家に到着した。

俺は車から降りる。

「まあたつた一年ぶりなんだからあまり変わっちゃいない」

まあそななんだろうが、格式ある家にしかない風情がある。

単に古いだけだが…………。

俺は久しぶりに、自分の部屋に戻った。

俺の部屋は漢方薬草の本などがたくさんある。

小こ頃からいつのを教えてたからな…………。

俺は小こ頃に使つていたベッドに座り、漢方の本を読む。

その本は専門的な表示が言葉も入っている。

今でも分からぬこともな・・・。

俺はこれ以上みていると皿が回る為、本を閉じた。

生成方法と調合は、母さんから畳つてある。

薬草の見分け方も少々、娘から父さんから畳つてある。

その為、薬を作りうと思えば作れる。

すると、ガチャッとドアが開いた。

「薰、そろそろ星伽神社に行きましょうか」

「わかった」

俺は母さんにそう返事をして立ちあがり部屋を出た。

家を出て、徒步で星伽神社に向かつ。

星伽神社は由緒正しい家柄であり、その専属薬剤師をしている父さんと母さんはとても優秀なのだと感じた。

感じるんだが・・・、母さんに至つては天然要素を感じる。

その辺を突っ込んだら母さんは泣くであらう・・・。

とこつわけで黙つておぐ。

しばらく自然に囲まれた道を歩くと、神社が姿を現した。

これが「星伽神社」である。

星伽家は代々、緋の巫女・・・通称「緋巫女」の血を引いている家系である。

そして、俺の家系である姫神家は星伽と並行して代々、薬草を基に薬剤を作ってきた家系である。

詳しいことは「姫神家伝代録」に書いてあるのだが、どうして星伽と関係を築いたかは記されて居なかつた。

まあそんなことを知つたからといって、俺が姫神家の後継ぎになることは絶対である。

一人つ子つてのもなんか不便だな。

だつて後継ぎが一人しか居ないんだからな。

ま、今さら嘆いたつて何も変わらん。

俺はそう思いつつ、父さんと母さんの後をついて行く。

そして、神社の近くにある家に入る。

中に入り、応接間的なところに連れられ、正座をして座った。

ここに初めて来たのは、8年前だ。

確かあの時は、母さんと父さんの付き添いで、薬を持って来た時だ。

俺がそんなことを考へていると、ふすまが開き、巫女姿の女性と少女が入つて來た。

そして対面するように座つた。

「さて、彼が彰の息子か？」

「はい。名を薰と言います」

俺は一礼をする。

そして、ある程度話を聞いて、俺は東京に帰つた。

帰つたのは、夕方4時半であった。

まあ、普通だらう。

あ、そういうば夕食を買つてなかつたな……。

まあいいか……。

明日始業式だからな……。

それに、クラス編成の説明を聞きに行かないとな……。

そして翌日・・・・・

俺は朝8：00に武偵高制服に着替えて武装し、家を出て、武偵高に向かつた。

学校に到着して、張り出されたクラス表を見る。

俺は2年A組・・・・・。

しかも・・・・俺一人だけ・・・・・。

なんでだよ・・・・・。

「薰・・・・一人なんだね。かわいそうに・・・・・」

と背後から声がした・・・・。

「春風、そういう方がぐさりと来るつて・・・・。それよりお前どのクラスだ?」

「私はC組だよ。雪弥と愛美も同じ」

「そりゃ。まあ俺はなれてつかりいいんだけどな」

「まあお互いに頑張ろ。それじゃあね~」

そう言って、春風は去つて行つた。

俺は教室に向かつた。

時間帶的には、武偵高生徒がすでに登校している時間帶だ。

だから周りには元薬専高の奴らしか居ない。

そして教室の前に立つ。

すると横から小学生くらゐの少女がやつて來た。

放すこともないので無視しておく。

そして先生が少女の名であるひなと俺の名を呼んだ。

少女が入つた後に、俺も続いた。

「彼女は強襲科の神崎・H・アリアちゃんです」
アサルト

女教師がそういうと、一人の男子がずるりと椅子から滑り落ちた。

「遠山君、どうかしたの？」

女教師が滑り落ちた男子に問いかける。

「べ、別に……」

男子はそう答えた。

「それならいいんだけど……。そして、彼は今年から武慎高に新設された薬物科の姫神 薫君です」

俺は一応、一礼した。

「それじゃあ席は……」

「先生、あたしあいつの隣がいい」

と神崎といつ少女がそう言つた……。

すると、その男子の横に座つていた大男が立ちあがつた。

「よ、よかつたなキンジ。なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！……」

大男は男子の手を握りながらぶんぶん振る。

「先生！俺転入生さんと席代わりますよ！……」

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねエ。それじゃあ変わつてもらえるかしり？」

「ええもぢりん！」

大男はそつと、少女が俺が座るはずの席に座つた。

少女はとことこと男子のところまで歩いて行く。

そして、立ち止った。

「キンジ、これさつきベルト。返すわ」

「ベルト…？」

まさかそんな関係なのか…？」

「理子分かっちゃった…」これ フラグばっさばきに立つてゐるよ…」

と窓際の少女が言いだした。

やつぱりやうなのか！

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持つてた！ これ謎でしょ謎でしょ！？でも理子には推理できた…できちゃつた！ キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れて行

つた！つまり一人は熱い熱い恋愛の真つ最中なのだよ

！」

以外に武偵つて大胆なんだな…。

俺はそう思った。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に…？」

「影が薄いヤツだと思つてたのにッ」

「女子どうか他人に興味がなさそくなくせに裏でそんな事を…？」

「フケツ…！」

すると少女は太もものホロスターから銃を取り出し、撃つた。

ズキューーンといつ銃声が鳴り響いた。

怖ッ…！

俺は一・二歩下がった…。

「れ…・・・恋愛なんてくだらない…・・・全員覚えておきなさい…・・・そんなことを言つヤツには…風穴あけるわよ…・・・」

神崎は顔を赤くして、そう叫んだ。

「じめんなさいね。じつこののは口常茶飯事だからあまり気にしないでね」

と先生はこつこつとほほ笑んだ。

「あはは…・・・」

「気にしないってところが無理だ…！」

「まあ薰君は、窓際のあの席でいい？」

「ええ。別にかまいません」

俺は空いている席に座った。

後ろにはさつき迷推理をした少女の前である。

そして、午前の授業が終わり、俺は教務科^{マスター}と呼ばれる教科塔に来ていた。

まあなんていうか・・・、薬物科の担当教諭に書類を提出しに来たのだ。

本當は昨日の昼に提出する書類であつたのだが、俺は実家に帰つていたので提出できなかつたのである。

その為、今に至つたわけだ。

俺は教務科のドアをノックし開ける。

「薬物科^{メディシン}2年の姫神です」

俺がそういうと、真正面に居る白衣の下ぶち眼鏡の男性がキュウリを生噛りしながら手を振つている。

「うひひひひひひ」

と男性が言つたため、俺は男性に歩み寄つた。

「これが書類です」

俺は書類を渡した。

「はいはい」

男性は書類を受け取つて、眺める。

「はい、確かに受け取つたよ。あ、これは薬物科^{メディシン}の学科塔に入る為のカードキーね」

男性はそつ言つて、一枚のカードキーを渡してきた。

俺はそれを受け取る。

「そういうえば自己紹介が遅れたね。僕は元薬物総合研究所教授の江川 淳。よろしくね」

「いらっしゃりなよろしくお願ひします」

俺はそう挨拶をして、教室に戻つた。

そして、すべてが終わり、俺は寮に戻つた。

遠山という人は、男子の質問攻めからうまく逃げた。

俺はいくつか質問されたが、ほぼ遠山という人の方に行つたため、助かつた。

だが、彼は不幸な人間だな・・・。

俺は寮の部屋に入り、ブレザーを脱いでソファに座って、テレビを点ける。

そして、横になり目を瞑る。

翌日・・・・・

俺は知らないうちに寝てしまっていた・・・・。

時計を見ると時刻は朝7：30を回っていた。

俺はゆっくりと準備をして、学校に向かった。

今日からは学科の授業が入つてくれる。

やつと本来の授業ができるといつものだ。

だが、トリクロルエチレンが搬入されているため、警戒はしておいたほうがいいだろうな・・・・。

そして、午後の授業になり、俺達は薬物科の学科塔に白衣姿に入る。

俺は第一研究所第一研究室で、インフルエンザを殲滅する薬品開発部門にまわされた。

第一研究所第一研究室・・・・・

「先輩、このサンプルの結果は効果なしです」

「そう一年の雨浪 隼しゅんが言つた。

「せうか・・・。なら、そのサンプルは適正に処理してくれ

「分かりました」

隼はそう返事をして、去つて行つた。

俺は電子顕微鏡で撮影されたPCのディスプレイを見ながら、インフルエンザウイルスの動きを観察する。

この研究室に居るのは俺と隼だけだ。

そもそも隼は、俺のパートナーだ。

薬物を扱うに当たり、パートナーは必須なのである。

いざ倒れたときとかに助けが居なかつたら困るからな。

だから、研究室に居る時は必ず2人で行動しなければならない。

「さてと、次はこの薬草を試してみるか・・・・。隼、次のサンプ

ルを作るが

「分かりました」

俺はインフルエンザウイルスを高濃度に抽出した液体をガラス皿に1滴垂らし、周りに薬草から抽出した液体を周囲に流しこんだ。

「後は結果を待つだけだな・・・」

「そうですね」

「んじや あ帰るか」

「え? もう帰るんですか?」

「ああ。根を詰めすぎたら事故につながるからな。無茶は禁物だ」

「そうですが・・・、他の研究室はまだ実験中ですよ」

「んなこと俺が知ったことか。他は他、うちはうちだ。それ以外の理由は無い」

俺はそう言つて、白衣をロッカーにかけ、ブレザーを着る。

「・・・分かりました。また明日ですね」

「そうだ。まあ、明日は今日より倍以上のサンプルを用意するつもりだ。それで一気に済ませる。いいな?」

「はい、構いません」

「よし、じゃあ戸締りは俺がするから先に出ろ」

「分かりました」

隼はそう言って、即座に着替えて、帰つて行つた。

俺も戸締り、機械を確認して寮に帰つた。

俺はこの時・・・・・、人生最大のバスジャックに遭遇するとは夢にも思わなかつた・・・・・。

3弾 Medicine (後書き)

江川 涼 えがわ きょう (20)

髪 : 銀髪のショートヘア

眼色 : エメラルドグリーン

身長 : 167 cm

所属 : 薬物科教諭

雨浪 隼 あめなみ しゅん (15)

髪色 : 藍色のショートヘア

眼色 : ダークブルー

身長 : 153 cm

所属 : 薬物科

翌日、外は雨が降っていた……。

それも土砂降りだ。

だが、バスに乗ってしまえば、雨なんぞ関係ない。

俺は制服に着替え武装し、黒塗りのアタッシュケースを所持し、バス停に向かった。

そして丁度、朝7：58になりバスが来た。俺は一番後ろ側に座った。

ハア・・・、今日から徹夜になるな・・・・。

俺は目を瞑つた・・・・。

しばらくバスに揺られていると、誰かの携帯が鳴つた。

うるさいな・・・・・マナーモードは無いのかね・・・・・。

しかし、その電話を取り出した少女が脅えている。

一体何があつたんだろうか・・・・・。

やけに騒がしくなってきた・・・・・。

「みんな、落着いて聞けよ・・・・・」

そう言つたのは、俺と同じクラスの大男、武藤剛氣であった。

「「」のバスに爆弾が仕掛けられてやがる・・・」

武藤がそういふと、周りは騒え始める。

「落ち着け！」とにかく片っ端から車内を探せ！」

武藤がそういふと、座席の下や網棚の上を探し始めた。

俺は中央に立つて、ただ見ているだけである。

たつた爆弾如きでビビつすきじゃないか？

「どうだ、見つかったか？」

武藤がそう呼びかけると、全員は首を横に振る。

「じゃあ「」にあんだけよ・・・」

武藤はそう嘆く。

「恐らくこのケースの爆発物設置位置は車体下だろ・・・

俺がそう呟くと、武藤が俺に歩み寄つて来た。

「それは本當か！？」

「ああ。「」の手の爆弾処理は俺でもできる。問題は、走行中の車体

の下にじつ潜り込むか・・・・だな

「速度だけは落とせねエダ」

「仕方ない・・・・、宙釣りでやるよ。だが装備が少ない・・・。問い合わせてるからその間までは速度を維持してくれ」

「分かつた」

俺は携帯を取り出し、雪弥にかける。

『もしもし?』

「俺だ」

『ああ、薰か・・・・。なんのようだ?』

「今、ケースCB3に遭遇した」

CB3・・・・、それは薬専高で決められた暗号の一つ・・・・。

CはC10se^v密室^v。

BはBus^vバス^v。

3は車を3カットした状態で、前から1エリア、中央は2エリア、後方は3エリア。

つまり、密室で走行中のバス後方に爆弾が設置してあるといつ意で

ある。

『おこおこマジかよー!?』

「ああ。だから至急、解体装備とワイヤを用意して持ってきてくれ。場所はGPSで知らせる」

『了解!すぐに用意してそつちに搬送する!それまで爆んなんよ!』

『そう言って、雪弥は通話を切った。

さてと・・・

俺は生徒手帳に入っていた解体書を見る。

基本的には起爆コードを切断する方法が無難なのだが、今回の場合、速度感知起爆も兼ね備わっている

ため、スピードを落とせるようにするのが最優先だ。

だが、コードはケースによつてカラーリングが変わっているため、間違えば、即時おさらばだ。

『姫神君、僕たちはどうすればいい?』

そつ問い合わせてきたのは、同じクラスの不知火であった。

『これと言つては無いが・・・・、お前らはなんだかこのケースを知つてゐるのか?』

『まあね。実は最近武僧殺しの模倣犯と思われる犯行がこの前あつ

たばかりなんだ」

「武僧殺し……ねえ。まあ詳しいことは助かってから聞くわ」

しばりくして、車の音がする。

俺はふと、窓の外を覗くと、銃を備えたオープンカーが並走してくる。

すると、その銃は俺に銃口を向けてきた。

「伏せろ……」

俺がそう叫ぶと、その瞬間、銃から無数の弾丸がバスの窓を貫く。

悲鳴が車内を包みこみ、数人の方を掠めた。

そして、銃弾は止んだ。

「行つたか？」

一人の男子が俺に問いかけてきた。

「いいや……、ロードノイズが消えねえ……。今も並走してやがる」

俺は鞄の中から試験管に入つた薬剤と布に包んであつた錠剤を取り出し、混ぜて外に放り投げた。

その瞬間、銃の銃口が試験管の方に向いた。

咄嗟に俺は懐から銃を取り出し、オープンカーのタイヤを撃ちぬいた。

オープンカーは壁にぶつかり、炎上した。

そして、ヘリがバスの上を平進し、ヘリから神崎と遠山が俺が頼んだ装備を持って車内に入つて来た。

「みんな無事か！？」

遠山はそう問い合わせる。

「負傷者は居るナビ、死者は辛つじて居ないよ

「それならいいが……、この装備を頼んだのつてのはお前か？」

「ああ。助かる」

俺はその装備を持って、屋根にワイヤの金具を撃ち込む。

「あたし達は何をすればいいの？」

神崎がそう問い合わせてきた。

「援護してくれ。予定所要時間は約10分……。さつきみたいな車が来るかもしてん……。」

「あのルノーね。わかつたわ、でも、こっちが危険と判断したら戻りなさいよ」

「分かつてゐる

俺はそう言つて、逆さになり、車体下を覗く。

やはり、ドテカイC4爆弾があつた。

俺は持つて来たミラーで四方八方を観察する。

コードは4本ある・・・・。

内2本が速度感知だ。

俺はロングニッパを2本使って、表面を少し削つて、電流を測る。

4本中2本が低電流であつた。

つまり、これが起爆である。

そして、高い奴が速度感知だ。

俺はその高い奴を+から切断し、-を切つた。

これで速度は関係なくなつた。

そして、起爆の方も切斷した。

その後、バスを停め、爆弾を剥し、念のため、防爆ボックスに入れた。

後はこれを解析して成分を割り出し、入手経路を探れば何か犯人につながる手掛かりがあるかもしない・・・。

俺がそう考えていると、神崎が俺に歩み寄つて來た。

「アンタ、爆弾解体できるの？」

「一応爆弾も薬物を使つてるからな。ある程度の解体基礎は一年の時に学んだ。それに中学時代は・・・。つて、話しても意味ないつか・・・。それじゃあ俺はこの爆弾を薬物^{デイジン}科学科塔第3研究

所で成分解析にあたる。だから担任の先生にも連絡しておいてくれ

「分かつたわ」

俺は警察車両で学科塔に向かつた。

第三研究所にたどり着き、俺は防撃服を着て防爆室に入る。

防爆室といつても、解体中に爆発したら俺は死ぬがな・・・。

俺は慎重にカバーを外し、薬品だけを引きぬいた。

これは結構高価な奴だぞ・・・。

ただの模倣犯がこんな品物を調達できるわけねエ・・・。

これは探りやすそうだ・・・。

俺はその薬物を扱っていると思われる会社に電話してみた。

80件中・・・・該当者なし。

最近そんなものを購入している人は誰も居ないらしい・・・。

となると海外経由か・・・・。

俺は薬連と呼ばれる組織に事情を説明し、聞いてみた。

そういう人物は居たらしいのだが、薬物販賣法で規制されていて、
その薬物を同時購入したものは爆弾
作成未遂で全員刑務所に服役しているらしい。

「千里の道も一歩からというが・・・、一歩で靴ひもが千切れたり
やねえか・・・・。どうするか・・・・」

まあ今考えたところでどうにでもなるわけが無いので、一応、
科に報告書として提
出してください。

俺は調べたことをすべてをまとめて、書類にした。

それを持って俺は教務科に向かった。

教務科に到着して、ドアをノックする。

「入つていいぞ～」

といつ返事が聞えたので入る。

するとそこには待っていましたと言わんばかりに構えている女教師が居た。

彼女以外は誰も居ない・・・・。

「今朝起きた武偵殺しのバスジャックで使用された爆弾の成分結果です」

「さ～すが薬物科、調べが早いな～。今でも鑑識科は調べてるっていつの間に～」

「はあ・・・・、それで薬物に薬品の入手経路は不明で、恐らく複数犯だと思います。ですが、それでは模倣にしては悪質ではないかと」

「姫神イ～、模倣犯は一人とは限らないぞ～」

「そうかもしてませんが・・・・」

「ま、この報告書は武偵局にも回してみる。まあ大した結果は期待

できないが・・・

「それでは、私は寮に戻ります」

「授業は受けないのか?」

「今やもう行つたところで、もう遅いですし・・・」

すると、チャイムが鳴つた。

「そうみたいだな。まあ、何か分かつたら一応連絡する

「分かりました」

俺はそう言つて、職員室を後にした。

そして、寮に帰り俺は、すぐに眠りに着いた。

しばらく寝ていると、チャイムが鳴つた。

「誰だよ・・・

俺は渋々ベッドから起き上がり、玄関に向かつた。

チャイムは連續的に押され、最終的には一一定音に聞えたが、いつになつた。

「はいはいわかったから・・・」

俺はそう呟きながら、ドアを開けた。

そこには神崎と遠山が立っていた。

「なんだよ？お一人さん・・・」

「アンタが帰つたつて聞いたから直接会いに来たのよ。それより、あの爆弾のことなんだけど・・・」

「ああ、あれね。データはこいつに転送している、まあ中に入つてくれ」

俺は一人を部屋の中に招いた。

「お邪魔するわよ」

と言つて、神崎と遠山は入つて來た。

「まあ適当に座つてくれ」

俺はそう言つて、寝室に置いてあるノートパソコンを持つて、リビングに戻り、起き上がる。

そして、研究室からPCに送つた解析結果を開く。

「これが、今回使われた爆弾の成分表だ」

俺は成分表を見せながら言つ。

「種類は〇四爆弾の成分と一致する」

「武偵殺しの十八番よ」

「やつぱ今回のも武偵殺しの仕業か」

「ええ・・・」

「神崎、俺はこの爆弾の入手ルートは探れなかつた。だが、お前なら何か心当たりがあるんじやないか?」

俺がそう問いかけると、神崎は俺の目を一身に見てきた。

「恐らく、イ・ウーが関係してゐるわ

「イ・ウー?なんだそれ・・・」

「アンタは知らないでいいのよ。それより、アンタは爆弾とか解体できるのね。薬物科メティシンと思つて馬鹿にしてたわ・・・」

「俺達は爆弾の作成から、解体までを習つからな」

「薬物科が爆弾解体を?どう関係あんのよ?」

「爆弾には薬物を使つていいからな・・・」

「まあかとは思つが・・・お前達が模倣犯、じゃないだろ?」

遠山は疑いの目で俺を見てきた。

「んなわけあるか・・・。俺はそろそろ寝る。帰ってくれ

「わかったわ。もしさまた何か分かつたら連絡して

お前の携番&メアドは知りませんよ~。

「何か分かつたらな

俺はそう言つて、寝室に入り眠りに着いた。

俺は欠伸を堪えるように、口を手で押さえる。

正直・・・・眠い・・・・。

そして、眠気に何とか勝った俺は、休み時間に寝ることにした。

次の時間は体育である・・・・。

俺は見学するがな。

薬専高では体力づくりのために、50?の重りの入ったボックスを背負つて山を登った経験がある・・・・。

それ以外に運動なんてしたことはない・・・・。

するとそこへ神崎がやってきて、横に座つた。

「何体育サボつてゐるのよ」

「サボつてゐるわけじゃねえよ・・・・」

「なら何してゐるって言つの?」

「考え方・・・・といふかあの爆弾についてだ」

「武僧殺しの爆弾のこと?」

「ああ。今は設計図が無いから分かりにくいだろうが・・・・ありやプラスチック爆弾の中で威力が最

大のものだ

「そんなに威力が強いのー?」

「ああ。アレだつたらあのバスはおろか、学園島」と消せる威力がある

「でもどうしてそんなモノをあのバスに?もし仮に、武僧以外の一般人まで巻き込むつもりなら学園島行きは選ばないでしょ?」

「これはあくまで俺の仮説だが、薬専高の生徒も狙われていたとしたら・・・」

「ちゅうとー、それどうこう」とー?もしそれが本当なら・・・
「ああ・・・」

「それならアンタも無関係じゃないわね・・・」

「俺も協力させてもらひつ。いいだろ?」

「ええ、構わないわ。ねえ、明日暇?」

「あ、ああ・・・。特に予定はない」

「わい。なり明日付き合こなさい」

「え?」

「明日になれば分かるわ

「わかった・・・」

翌日・・・

俺は念のため、クロロホルムを装備し、部屋を出て、新宿駅に向かつた。

新宿駅で待つていると、そこに神崎がやって來た。

「早いわね。まあいいわ、ついて来て」

アリアはそう言った。

俺は神崎の後をついて行く。

しばらくして、新宿警察署に到着した。

「ここになんの用があるんだ?」

「ついてくればわかるわ。それより・・・、隠れてないで出できなさい!」

誰か尾行してたのか!?

俺は慌てて振り向く。

そこには、遠山が立っていた・・・・。

なんでお前が居るんだ・・・・。

「氣づいてたんなら言えよ・・・・

遠山はさつ神崎に叫んだ。

「迷つてたのよ・・・・。アンタも武偵殺しの被害者だから・・・・

「なりどうしてそいつは直で連れて着てんだよ?」

「薫はこの件で、ある仮説をあたしに教えてくれたわ。その仮説が
本当なら、薫は完全に被害者よ」

「仮説?なんだよそれ・・・・」

「武偵なら自分で考えなさい」

神崎はやつ呼び、警察署に向かつて歩き始めた。

俺も神崎に続いて歩き始めた。

遠山もついてくる。

そして、面会室に入る。

「神崎、今から誰に会つんだ?」

しかし、神崎は答えなかつた。

「遠山、お前は神崎の横に座れ

「俺は遠山に近づき、耳元でさつ語つた。

「なんだだよ？」

「こんな時、俺はどんな対応をすればいいか分からん……」

「俺だつて苦手だつての……」

遠山はそうこいつつも、神崎の横に座つた。

俺は壁にもたれかかる形で立つた。

しばらく待つていると、まだ20代前半ぐらいの女性がアクリル板の向いの部屋に連れられてきた。

「ママー！」

俺は神崎の言つた言葉に度肝を抜かれた。

遠山も驚いた様子だ……。

「あらあら、男の子を一人連れてくるなんて……、ビックリが彼氏さん？」

「か、彼氏なんかじゃないわよー！」こつは遠山キンジ、あつちに立

つてるのは姫神薫・・・ビッカも武
偵殺しの被害者よ」

「そう・・・はじめまして、神崎かなえといいます。ちょっと危
なつかしいけど、仲良くしてあげて」

「な、何言つてるのよーそれより本題に入るわ。実は薫が起てた仮
説には、薬専高の生徒も狙われている
んじやないつかつて考えているの。だから、その線も考慮して調べ
て行けば犯人に行きあたると思つわ」

「アリア、それはあくまでも仮説でしょ？暗中模索の状態で動いて、
アリアが危険な目に遭うかもしけな
いわ」

「でもママの免罪を晴らすことは・・・」

「神崎、時間だ」

監視がそう言つて、かなえさんの腕を掴み連れて行こうとする。

「止めろーーママに乱暴するなーー放せーー！」

「アリアー！今のあなたではイワーに勝てないわー！まずはパートナー
を見つけなさい！曾お爺様にも優秀なパ
ートナーが居たわー！アリアも信頼できるパートナーを見つけなさい
ー！」

かなえさんはそう言い残して、連れて行かれた。

面会時間・・・3分49秒・・・。

重犯者の面会可能時間だ・・・。

そんなに悪いことをしたような見えたが・・・。

確か神崎は冤罪って・・・。

神崎はその場から立てなさそうなくらいに頃垂れていた。

「許さない・・・。あんな扱いをしていいわけない・・・」

神崎はそう呟いた。

「帰るわ。こんなところに居たってなにも始まらない・・・」

俺はそう言って、ドアを開けて外に出た。

すると、受付に俺の知っている刑事が居た。

公安の課の沖田総司・・・。

ちなみに公安の課とは、「殺しのライセンス」を持つ刑事で、彼らには人を殺める権限がある。

俺は沖田さんと田があつた。

「あ、姫神君。こんなところでなにをしているんだい?」

「ちょっと用事がありまして・・・」

「まさか悪い」としたわけじゃないよね?」

そう問い合わせてきた沖田さんのことは、殺氣に満ち溢れていた。

「そんなことしませんってーてかしたら即あなた方の標的になるじゃないですかーー。」

「当たり前だよ。なんせ薬専高生は下手したら即殺人者になりかねないからね」

「や、それより沖田さんはどうしたんですか?」

俺がそう問い合わせると、沖田さんは周りを気にしている様に困った。

「うう、話せないんですね」

「まあね。これは私達にとつても失態だからね」

「やうですか・・・・、詳しいことは探りませんが、お気をつけで」

「やうするよ。それじゃあ、またね」

沖田さんはさつさつと、警察署を出て行つた。

しかし、深く探ると逆に殺されるから止まつ・・・・。

俺がそう思いつつ、外に出ると、雨が降っていた。

「来る時は晴れてたのにな・・・」

すると、神崎は雨の中歩いて行つてしまひ。

遠山は神崎の後をついて行く。

仕方ねえか・・・。

俺も二人の後をついて行く。

雨の中、人通りは少ない。

もうすでにずぶ濡れだ・・・。

「神崎、お前が警察の奴らを訴えたい気持ちは分かる。でもな、お前がそう言つたところで無罪にならねえぞ」

俺がそうこうと、神崎は立ち止つた。

「アンタに何が分かるのよ・・・? あたしの気も知らないで知つたような」と言わないで!」

俺は神崎の言つたことに苛立ちを感じた。

「・・・わかった。もうお前に関わらない

俺はそう言つて、その場を去つた。

この状態でタクシーに乗ることも、バスに乗ることも、地下鉄に乗ることも、モノレールにも乗れないだろう・・・。

仕方ない・・・。

歩いて帰ろう・・・。

俺は歩いて寮まで帰った。

翌日、俺は部屋に居た。

昨日のことだと神崎に会うのが嫌だつたからだ。

俺はベッドに寝転び、目を開じる。

すると、携帯にメールが届いた。

俺は携帯を手に取り、メールを開く。

知らないアドレスだが、題名に遠山と書いていたのですぐに分かった。

「昨日のあれは言い過ぎだぞ。ちゃんと謝った方がいい。それから、アリアは今日、ロンドンに帰るらしい」

と書いてあつただけだ。

謝るのは嫌だからその部分だけは無視しておく。

が、少し気になったのが、最後の文……。

神崎がロンドンに帰るといづ文……。

「俺にどう関係あんただよ……。」

俺は返信もしないで携帯を閉じ、眠りについた。

プルルル・・・・・・・・・・・・・・と携帯が鳴る。

今回はメールじゃない・・・・・。

俺は寝ぼけながら電話に出た。

「はい? もしもし」

『姫神薫、君は大切な仲間を失うことになる』

『そういうた相手は、変声機を使っていた。』

『明らかに怪しい……。』

『それに大切な仲間って……？』

『どういう意味だ？』

『『そのままの意味だ。神崎・H・アリアをチャーター機』』と消し去る』

『一瞬、その意味が全く呑み込めなかつた……。』

『神崎を殺す？』

『コイツは一体何を言つてゐるんだ？』

『もし仮にそれが本当なら、何故俺が関係する？』

『今回は君も関わり深い者が犯人だ』

『どうこうことだー…答えるー。』

『すべてを知りたかつたら午後6時47分発のロンドン行き、チャーター機AMA600便に乗るといい。』

『君の出番も用意してある』

「意味がわからんねえよ！……大体お前は……」

俺が問い合わせようとした時、電話が切れた。

「くそッ！」

俺は時計を見る。

時刻は夕方5時半……。

今から行けば余裕で到着する。

「行くしかねえか……」

俺はそう咳き、クローゼットに収納していた布に包まれたモノを2つ取り出す。

布を解き、それを手に取る。

それはリボルバーと呼ばれる銃……。

S&W M500 (8インチモデル) とS&W M686 (4インチモデル) である……。

「中学以来だな……」

俺は武僧高制服に着替え、腰に付けたホルスターにM686を装備し、腰に付けたホルスターにM500を装備した。

どちらも・500S&Wを装填してある。

「よし・・・・行くか」

俺はタクシーを呼び、空港に向かつた。

空港に到着し、俺はAMAのカウンターに向かつた。

やはりチャーター機に乗る為にはチケットが必要だろ。

「すいません、AMA600便の空席はありますか?」

「少々お待ちください」

受付嬢はそう言つて、調べ始めた。

「残念ながら、空席はございません」

おこおこウソだろ・・・・。

空席が無いんじゃ入れねえじゃねえか!

俺は少しここらし始めた。

しかし、あの時、相手が言つていた・・・・。

「君の出番も用意してあるハヒ・・・・・・。

もしかしたら・・・・・・。

「それでは、姫神薫の名で予約はしていませんか?」

受付が調べた。

「ええ、『ゼロ』ますよ」

やつぱりか・・・・・。

「実は私、『ゼロ』のものです」

と俺はブレザーの胸ポケットから武慎高生徒手帳を取り出し見せる。

「あなたが姫神様で『ゼロ』ますか? それでしたら、『ゼロ』を・・・・・

受付はチケットを取り出し、渡してきた。

「昨日、直接ご予約を頂いていましたので、予約しに来た方が姫神様かと思つていまつたが・・・・、代理でいらしたんですね」

代理・・・・、恐らく電話の相手だらつ・・・・。

「まあそんなどうですね」

「されど、『ゼロ』へつてお寛ぎ下さい」

受付は軽く会釈をした。

俺は搭乗口に向かい、機内に乗り込んだ。

俺の部屋はF ？号室である。

中に入ると、テーブルに赤ワインが置いてあり、俺宛の手紙も添えられていた。

その手紙を開いてみる。

くよじこじや、姫神君。ここでは本気を出さないと殺られるから気をつけたまえ

とだけ書かれていた。

なんで俺の本気を知つてんだ・・・！？

コイツ・・・俺のこと調べてやがる・・・。

すると、機内放送が流れ、俺は座席に座り、シートベルトをつける。

夕方6時49分、機体は離陸した。

シートベルトサインが消え、俺はテーブルに武装をすべて並べる。

右からM500、M686、.500S&W弾×60発、
バタフライナイフ、防弾グローブ・・・。

俺は防弾グローブを装着し、M500とM686をホルスターに戻

し、弾をリボルセットというリボルバー専用のリローダーに5発と6発を腰のリローダーホルスターに容れる。

後はこの機体が、何もなく目的地に到着することを祈るだけだ。

しかし、離陸してすぐに、積雷雲の近くを飛んでいた。

「ただ今、積雷雲の側を飛行中です。多少揺れますか、飛行に影響はございません」

という放送が流れた。

この機体を操縦してる飛行士は、下手だな……。

すると、銃声が鳴り響く。

それもマグナム弾を放った時と同じ音が……。

行くか……。

俺はM686を装備して、ドアをゆっくりと開ける。

そこには、先に出ていた遠山と神崎が、乗務員に銃を向けていた。

「Attention Please でやがります」

乗務員はそう言つて、催涙弾の様なモノを取り出し、投げた。

客は部屋に逃げ込む。

しかし・・・・これはダメだ！

俺は銃を構え、乗務員にめがけて撃つた。

しかし、数ミリのところで外れた。

「チツ！逃がしたか・・・」

俺は歩いて、神崎と遠山が逃げ入った部屋をノックし、開ける。

すると、遠山が銃を構えてこちらに睨みを利かせてきた。

「待て、俺だ」

「姫神！…なんでお前が・・・？」

「ちょっとあいつに用があつてな

俺はそう言つて、神崎に目線を移す。

しかし、神崎は田を反らした。

「遠山、ついて來い。この機体に爆弾が仕掛けである

俺がそういふと、遠山と神崎は驚いた表情をする。

「どうじうことだー？爆弾つて……」

「実は俺の携帯に電話があつて、この機体」と神崎を消し去ると言つていた。恐らく、爆弾で爆破するつてことだらう。とにかく、お前はどうしてここに居る？』

「この際だから、お前にも教えておく。実は去年の武偵殺しは、バイクジャック、カージャック、シージャックという順に、標的が小さいものから大きいものへと変わつてゐる。が、ここで一度、標的は小さくなる。チャリジャック、バスジャック……そしてこのハイジャック……。だが、去年のシージャックでは一人の武偵が殺された……。バイクジャックでも、カージャックでも被害者は居なかつたのに……。そして、流れが一緒なら……。」

「ハイジャックで一人狙われる……といふことか」

俺がそう続けると、遠山は頷いた。

「その標的がアリアだ」

それはどうかな……？

すると和文モールス信号の音が流れだす。

＜オイデ オイデ イウーハ テンゴクダヨ オイデ オイデ
ワタシハ イッカイノ バー ニ
イルヨ＞

「誘つてやがる……」

「行くしかないでしょ」

神崎は立ち上がり、白銀と漆黒のガバメントを取り出した。

俺はM686を構えながら外に出た。

そして、一階のバーに向かう。

「薰、なんでアンタがここに来たの・・・?下手したらアンタまで死ぬのよ・・・」

神崎は俯いた表情で問いかけてきた。

「電話の相手にムカついた・・・。それに、俺と関わり深い奴が犯人らしい。そう言われちゃ、黙つておけなくてな」

「そり・・・・・」

神崎はそりと黙つた。

そして、バーにたどり着くと、客室乗務員がカウンター席に座つていた。

「今回もまんまと引っ掛けつてくれやがりましたね」

そういうて、乗務員は立ち上がった。

俺は乗務員に銃口を向ける。

「動くな。動いたら撃つ！」

「出来るもんならやつて見やがれですーー！」

乗務員がそう言つた瞬間、背後に気配を感じた為振り向くと、仮面をした男が日本刀を振り上げていた。

俺はM686で受け止める。

「相変わらずだな・・・、薫はーー！」

男はそう言つて、さらに力を込めてくる。

この力・・・、昔経験がある・・・。

「姫野・・・なのか・・・？」

俺がそう問いかけると、男は乗務員のところまで宙返りをした。

「久しぶりだな、薫。元気そうじゃないか」

「姫野！..どうしてお前がこんなことをするー？」

俺は感情的になつてているのかもしけない・・・。

だが、感情を抑えることができないのだ・・・。

「薰、あいつのこと知ってるのー?」

「あいつは姫野 愁・・・。元青森武偵中ランクの武偵だった奴だ・・・」

「ノンノン、彼は今もランクの実力だよ、姫神君」

乗務員はそう言って、マスクを外した。

もちろん、姫野も仮面を取った。

「理子!..」

神崎と遠山は驚いている。

「どうしてお前達が・・・」

俺がそう問いかけると、姫野はニヤリと笑った。

「それが、もう一人いるんだよな、これが・・・」

「もう一人・・・だと!..」

「それじゃあ登場してもらいましょー!元爆弾魔こと矢橋 洋^{こう}!」

俺はその名を聞いて驚いた・・・。

すると後ろから、黒いコートを着た少年が、俺の横を不気味に通り過ぎ、理子達のところに立った。

「わざわざ紹介するな・・・、リュパン」

「その名で呼ぶんじゃねえよ、洸

峰は男の様な口調となつた。

俺より驚いたのが、矢橋が居ることだ・・・。

歴史上、最も残忍で、邪悪な爆弾魔である矢橋が居ることが・・・。

4弾 Despair (後書き)

姫野 愁 (17)

髪：濃い藍色でエル・ワトソンのような髪型

眼色：ダークブルー

身長170cm

愛用の武器は日本刀で、銃はコルト キングコブランを使用。

矢橋 洸 (15)

髪型：漆黒で武藤の様な髪形

眼色：ブラウン

身長：157cm

武装こそしていないが、爆弾を作る為の装備は整っている。

何故だ……！？

コイツは終身刑で服役しているはず……。

なのに何で俺の前に矢橋が立つてんだ……！？

俺は今の状況を理解できなかつた。

「その顔だと、なぜお前がココにいるんだ……と言いたそعدだな。なら教えてやる……。」この二人が逃がしてくれたからだ

俺は矢橋が言つた言葉に驚いた。

「そんなのありえない……。第一ーあの監獄を逃げられるはずがないだろー！」

俺はそう怒鳴りつけた。

「落ち着きなさいーこれはアンタを動搖させるためよー！」

神崎が言つたが正しい……。

俺はいつたん深呼吸をして、氣を落ち着かせる。

「薰、昔こういう話をしたよな？もしあ互いどちらかが牢獄に入つた時、どうやって助け出すか……。

つて

「まさかお前・・・、監獄あそびに居た奴らを全員・・・」

「殺したよ。みじんに切り刻んでな」

チツ・・・やつぱりか・・・。

「理子、ijiはお前に任せん。俺と愁は先にイワードに戻つておく」

「りょうかーい!まつかせなさい!」

そう峰が言つと、矢橋と姫野はバーの裏口に入つて行く。

「待て!」

俺はそう叫び、銃を放つた。

しかし、姫野の刀によつて碎かれた。

「言つただろ?薫。剣は銃よりも強し・・・。お前は俺に勝てないんだよ」

姫野はそう言つて、裏口の中へと消えた・・・。

「チツ・・・、遠山、神崎。俺は爆弾を探してくる。峰のことは任せた」

「わかつたわ。だから、何があつてもアンタは爆弾をどうにかしない!アンタは理子とは関係ないんだから。もし割り込んできたら

風穴！

神崎はガバを取り出しながら俺に言つてきた。

「・・・分かつた」

俺はそう言つて、バーを出て、貨物室に向かつ。

もし、矢橋が機体ごと爆破するといつことは、それほどドデカイ爆薬を使うということだ・・・。

となると、貨物しかねえだろ・・・。

俺はそう思い、急いだ。

しばらく走つて、やつと着いた。

そして、く非常貨物入口ゝと書かれていたドアを薬専高で留つたアソロツクスギルで開ける。

中に入り、まず目の前に見えたのは、大量のくKEEP OUTゝとくDANGERゝと書かれたテープが張られたドデカイ箱がある。

「これじゃあ核爆弾と同じ威力になつちまつぞ・・・」

俺は箱に近付き、中に入つているモノを調べる。

この箱は、薬連直属の薬品会社の箱で、薬品名は必須記載事項だ。

そしてやっと見つけた。

«nitroglycerin 5kL»と書かれていた。

おいおい・・・マジかよ・・・。

こんなもんが乗ってたら確実にこの機体は薬物運搬法で第三種貨物飛行免許が必要だ・・・。

もし、このことを知らないでパイロットが操縦してんなら・・・。

俺は急いで、起爆装置かタイマーを探した。

そこには衝撃起爆装置ショックスイッチが着けられていた。

が、これは衝撃が無い限り起爆しない。

俺はそのことを知らせるために、急いで「コクピットに向かった。

てか、ここからコクピットまでほぼ機体を縦断するじゃねえか！

俺はそつ心の中で叫びながら走った。

その途中、バーに向かう通路から何発もの銃声が聞えた。

俺の体は、バーに向いた。

しかし、途中で立ち止まる。

「割り込んだら風穴！」といつ神崎の言葉が脳裏に浮かんだ。

俺は振り返り、コクピットに向かった。

そして、たどり着き、ドアをたたく。

「すいません……」の機体に二トログリセリンといつ爆発液が載つてこます。すぐに開けてください。」

俺がそう叫ぶが、誰も返事をしない。

まさか……

俺はM686を構えて、ドアノブを回し、押す。

しかし、ドアはビクともしない。

まるで溶接しているかのようにな……。

まさか、ヒーティングボムを使いやがったな……。

ヒーティングボムとは、爆発をせずに高熱を発する爆弾で、最高温度になると、鉄を溶かすほどである。

作り方によつて時間は様々に発動する。

俺はドアノブ目掛け、銃を放つた。

しかし、一発では微動だにしなかった。

しかたない・・・、六連射するか・・・。

俺は弾をリロードして、一点に構え、放つ。

ドアはノブ一点に6発全弾でドアカイ穴を開けた。

そして、ドアを蹴破った。

その瞬間、機体が揺れ、俺は体勢を崩し片膝をつぐ。

さつきの揺れぐらになら二トロも反応しないだろ・・・。

それよりパイロットは・・・

俺は操縦席に向かい、覗く。

しかし・・・誰も居なかつた・・・。

つまり・・・この機体にパイロットが存在していない・・・。

俺は計器類の上に向やら機械の様なものがあつたため調べる。

それは、遠隔飛行システム・・・通称RFSリモート・フライ・システム・・・。

まずはこれを取り外さなければ、じつちでそうだ出来ねえしな・・・。

俺はそう考え、機器を銃で撃ち、取り外した。

さてと、自動操縦にしてと・・・・。

しかし、自動操縦ができなかつた。

ぶつ壊されている・・・・・。

仕方ないか・・・。

俺は渋々操縦桿を握る。

すると、無線に入る。

ガガアー

『「ひから羽田コントロール、600便応答願つ。ひから羽田コントロール、600便応答願つ。』

俺は側にあつたインカムをつける。

「ひから600便」

『「一体東京湾上空を旋回し、何をしていい?』

「今、機内で武偵2名と・・・・」

俺が状況説明をしていると、ドアがいきなり開く。

「神崎!お前何しに・・・。てかその怪我大丈夫なのか!?」

「あたしは大丈夫！アンタこそ爆弾はどつたのよー？」

「衝撃爆弾・・・・・。タイマーも遠隔起爆装置が無かつたところ

からして間違いない・・・。恐らく、着陸時の衝撃でドカンだろ・・

・

「どつさんのみー。それだつたら着陸出来ないじゃなー。」

「だから今、策を考えてんだろ・・・・・。」

『600便、爆弾とはどつこいつだー。』

「武偵殺しの仕掛けた奴だ。タイマーも遠隔起爆装置が無いのが唯一の救いだな・・・。」

『なりば海に進路を変えて海上で・・・。』

「そんなんじや、じつに乗つてこる一般市民はどつなる。アンタらはそいつらを見捨てる気か？』

『筋に腹は代えられん・・・。』

俺は羽田コントロールの奴の言葉にイラッときた。

「わかった・・・。お前らみたいな下衆の面のよつなとこひはまつ着陸しない・・・。』

俺はそつ言こ残して、インカムの電源を切つた。

「どつしたの？』

「羽田の見解じや、俺達の死が望みみたいだ」

「どうこう」とか「？」

「つまり・・・、大勢の人がいる空港で爆発するより、上空で爆発してほしくないだ」

羽田にイラッと来たので、捏造しておぐ。

「日本の空港つて最低ね・・・。これからどうするの？」

「薬連に連絡を取つて・・・」

すると、爆発音と振動が来た後、異常を知らせる警報音が鳴る。

「どうしたのー？」

「分からねえが・・・機体側2基のエンジンがlost power
「つて表示されてやがる・・・。とにかく一度、高度を上げる」

しばらくして、キンジがやって来た。

「遠山、峰はどうした？」

「逃げられたよ・・・。それより、お前一人で操縦してんのか？」

なんだか・・・いつも遠山じゃないみたいに聞こえる・・・。

『氣のせいか・・・

『まあな・・・。遠山、やつちの席に座つてくれ』

『べつにいいが・・・、操縦の仕方わからねえぞ』

『別にかまわなこや。ちょっとした条件合せ・・・』

俺はポケットから携帯を取り出し、愛美に電話をかける。

『もしもし。薰。珍しいね、薰から電話してくるなんて・・・』

『やうか?まあこつも合つてゐしな』

『やうだね~』

『世間話はまた帰つてからとこいつじで、愛美、お前の姉と話しきで
あるか?』

『え?う、うん。多分薬連空港に居ると思つ。だけビビつて?』

『滑走路を貸してもうひまなかつて思つてな』

『・・・また危ない」と首突つ込んでるんだね・・・・・

『・・・ああ』

『わかつた。姉さんに連絡して、薰の携帯に連絡してもうひまなかつて
言つとくべ』

「悪いな・・・

『その代わり、無事に帰つてきたら何か奢つてね』

「わかつた」

そして、愛美との通話を切つた・・・。

「神崎、ちよつと来い」

「なによ?」

神崎は俺に歩み寄つて來た。

俺は懐から隠し持つっていたクロロホルムを染み込ませていたガーゼを取り出し、神崎の口と鼻を塞いだ。

「な・・・んで・・・」

神崎はそう呟いて氣を失つた。

「薰、お前何をした?」

「ただ眠らしただけだ。この傷、峰理子に斬られたんだろ?」

「ああ。だが傷は浅い。そんなに警戒するようなものじゃないだろ」

「まあ確かにそうだ。けど、神崎って頑固だろ?病院に行けつて言つても言つこと聞きそつにないから

な・・・。だから眠らせておかないと連れていけないだろ。この傷

がどうであれ、病院で正確な検査を
してもらわねえと、後であいつみたいになつたら困る……」

「あいつ？」

「あ、すまない……。お前達の知らない奴さ。とにかく、着地地
点は薬連の輸送滑走路だ」

「「！」かうひのくらいかかる？」

「おおよそ一〇分……。ま、外側さえ無事なら大丈夫だらう。
一応念のために、この機体に詳しい奴
から聞いてくれ」

「わかつた。こいつは武藤が一番詳しい」

武藤つてあの大男か……。

しかし……こんな大型機体なんて半年ぶりだ……。

校長の好意で第三種貨物飛行免許を取つたが……、こんな時に役
立つとは……。

すると、俺の携帯が鳴る。

非通知だが、恐らくあの人だ。

「もしもし、凛姉さん？」

『よく薰。愛美から言われてびっくりしたぞ。で、何の事件に巻

『巻き込まれたんだ?』

「巻き込まれたといつか、自分から行つたといつか……まあやんなといふ」

『訳が分からぬが……私たちは何をすればいい?』

「滑走路を貸してくれ。できれば本路をな」

『無茶言つね、本路は危険物積載のみ解放するようになつてゐる。旅客機なんかに許可が下りるわけが無いだろ。許可が下りるといつたら、副路だ』

「この機体には二トロが載つてんだ! そんなノーマル着陸仕様の副路じゃ爆発すつだろ!」

『それを先に言え!! 滑走路のことは何とかしておへー! できればあと20分待つてくれ! そうすれば何とかなる!』

「20分か……。もつと暇つが……」

『無理だ、薰』

やつとたのは遠山であった。

「なんで無理なんだ?」

「燃料が漏れている。武藤が言つにはあともつて10分が限界だそ

うだ」

「たつたそれだけか！？」

『どうした？』

「それが、この機体の飛行可能時間が10分もないらしい。……『それだけじゃ許可が下りるかわからぬ』『まあとにかくやってみる……。お前はこっちまで来ておけ。用意ができたらすぐに始める』

「了解」

そして、無線が途切れた。

「遠山、あっちに着いたら神崎と病院に行ってくれ。恐らく俺は警察に事情を聞かれるかもしれん」

「わかった」

しばらく飛行して、薬連日本支部の空港に到着した。

『ザザア……』

『薰、今さつき防衛省から電通が来た』

「なんだって？」

『全空港の滑走路は着陸不可だそうだ……。まあ、薬運専用空港は国なんぞに仕切られないがな』

「だから選んだんだよ……。それで着陸許可はどこだつた?」

『脅したら簡単にくれた』

「脅したのか……。恐ろしい……。」

「ならあと何分で着陸準備が整つ?」

『もうできてるよ。タイミングは美春に任せるとの』

美春……か……。

『いひら滑走路監視塔の美春。600便、応答願います』

「600便、聞えている」

俺がそういうと、5秒ほど美春は黙つた。

『貴方には死んでいただきたい……。ですが、貴方以外の方は無関係……。無事に着陸できるよう尽力いたします』

「……わかった」

『機体を滑走路に向けてください』

俺は言われるまま操作する。

『機体を降下させてください。そのまま、機体前部を浮き上がらせて下さい。その後、後輪を下して、着地させてください』

おいおい・・・このままじやノーマルじやねえか！

「おい！一丁口が載つてゐるって聞いていいのか！？」

「今お前舌打ちしだだろ！！まあいい！また一からやり直しだ」

俺はもう一度、高度を上げて、もとの位置に戻った。

『それでは、車輪を全輪同時に下を並走しているマウントカーに載せてください。ただそれだけです』

「カメラだけじゃ見えないとこもある！」

・・・そのまま高度を下げれば丁度です』

やつてみるか・・・・。

俺は
一か八か、
機体を下した。

すると、なんとかマウントカーの上に着陸出来たみたいだ・・・。

俺は急いで、エンジンを逆回転させる。

マウントカーでもブレーキがかかる仕組みだ……。

そしてやつとの思いで停まった……。

その後、すぐに薬連の救急車が到着し、神崎と遠山を乗せて武偵病院に向かった。

俺はその場に残った。

「……ならマス」// すら来ない。

いいや、正確には来れないのだ。

部外者は立ち入り禁止だからな……。

乗客もバスですぐに外に追いやられた。

俺は薬連に加盟しているため追いやられはしない。

俺が着陸した機体を見ていると、凛姉さんと美春が来た。

「おつづ~薫。無事に着陸できたな」

「さすが凛姉さんの部下だな。すぐに合図させてくれて助かった」

「そんな技術あるわけないだろ……。お前が勝手に合図せたんだ

「は? んなわけあるか……。無理に決まっているだろ」

「いいえ、確かに貴方は自分で命を貰わせました。恐らく感覚的に命を貰わせたんだと思います」

あり得ない・・・。

あの短時間で俺は何をしたっていうんだ・・・?

「分からぬ・・・何をしたのか・・・」

「フツ、お前らしいな。じゃあまた何かあつたら電話くれ〜

と言つて、凛姉さんは去つて行つた。

美春もついつい行こうと振り返つた。

「美春・・・」

と俺が呼ぶと、振り向いた。

「薰さん、今回は運良く生き残ることができましたが・・・」

美春はそういつと懐から銃を取り出し、俺に銃口を向けてきた。

「いつかきっと、私のコルトが貴方の命を奪います。その時が来るまで、死んではいけませんよ」

そうつって、美春はコルト キングコブリを懐になおし、立ち去つた。

つまり、死ぬなってことか・・・。遠回じに言ひやがつて・・・。
かわいくねえな・・・。

俺は薬連の空港から寮に戻つた・・・・。

寮にたどり着くと、何やら箱が置いてあつた。

箱にはく青森産つがるリンゴと書かれていた。

差出人を見てみると、母さんからだ。

俺は箱を持って、部屋に入る。

そして開けると、真っ赤なリンゴがきれいに並べられていた。

丁度いい、これを手土産に神崎のところに行くか・・・。

俺は果物ナイフと林檎を4玉を袋に入れて、武偵病院に向かつた。

病院にたどり着き、受付で聞いた部屋に向かつた。

そして神崎の居る部屋にたどり着き、ノックする。

「入つていいわよ

と返事がしたため、中に入る。

「 よ～神崎、元氣にしてるか？」

「 なんで入院しているのか聞きたいくらいに元氣よ」

「 そ～かそ～か～、な～い～さ。それより遠山は～？」

「 キンジなら買い物に行つたわ」

「 入れ違いかよ・・・。まあいいか・・・」

「 それより、アンタなんで來たの？」

「 見舞いだよ・・・」

俺がそ～い～うと、神崎は持つて來た林檎をジ～ツと見ていく。

「 林檎、食つか？」

俺が問い合わせると、首を縦に何度も降る。

俺は近くの椅子に座り、林檎の入つた袋を机に置き、果物ナイフと林檎1玉取り出し、6等分に切る。

「 そ～い～え、アンタ、あたしに何か吸わせたわよね？」

「・・・・クロロホルム」

「なんでそんなモノを常備してんのよー?」

「ござつて時に使つんだよ・・・。それより、検査結果はどうだつた?」

「異常なしよ。ここに入院してる場合ぢやないつてのこ・・・」

「死んだら元も子もないだろ・・・」

俺がそういうと、神崎は黙つた。

俺は少し遊び心で、林檎を鬼の形にして、差し出す。

「食べろ」

「毒・・・・入つてないわよね?」

神崎は警戒する。

「警戒しなくても、大丈夫だ」

神崎は恐る恐る、食べる。

「神崎、お前には教えておいた方がいいだろ?・・・、矢橋と姫野のこと・・・・」

「そう来ると思つたわ・・・。アンタ、薬物だけを扱つていた様には思えないわ・・・」

「こいつには話しておかないといけないな・・・・・。

「・・・俺は中学時代、青森武偵中強襲科で姫野と組んでいた。互いに信頼し、背中を任せられるほどだつた。が、俺が高校に上がるとき、薬専高からに俺が進路を決めた時、あいつも武偵を辞めた・・・。それからは、噂でしか聞いたことが無いんだが・・・、あいつはどこかの組織に入つたと聞いていた・・・。」

「それがイワーだつたつことね

「そうだ・・・。そして矢橋・・・。あいつは去年、俺が捕まえた爆弾魔だ・・・。」

「爆弾魔！？」

神崎は驚いた表情をした。

「ああ。奴が起こしてきた爆破事件は世界で4000件・・・・・、すべてがプラスチック爆弾だ。被害は4000件中全件最低3名は死者が出ている・・・。あいつは悪魔だ・・・。俺の仲間も300人ほど殺された・・・。先輩も・・・教師も・・・同僚も・・・全員無残な死にざまだった・・・。俺は公安0課と武装検事と協力して、去年の末、やつと捕まえた・・・。そして、公安0課300名・・・。武装検事200名が見守る中、あいつは終身刑に処され、離島監獄に囚役された・・・。」

「公安0課と武装検事がそんなに・・・・・。」

「世界中の公安の課と武装検事が動いたからな……だから、奴を逃がしたつてことは、峰も姫野も死刑確定だ……。このことがバレたら、日本の公安の課と武装検事は世界から批判されるだろ? な……」

俺はそういこいつ、林檎をもつ一つ取り出し、切る。

「じゃあどうするの?」

「どっちも捕まえるわ……。姫野と矢橋はこの俺が……」

切つた林檎を神崎に渡す。

「アンタ一人で出来るのかしら?」

「これでも元強襲科ランクIIだ。やるときほやるときほ……。そん時は協力してくれ……」

「いいわよ

神崎はそういこいつ、手を差し伸べてきた。

まだ食う気かよ……。

俺はもうひとつ、林檎を切つた……。

翌日、神崎も退院し、普通の生活となつた。

一般教科が終わり、俺は屋上で空を眺めていた。

「姫野と矢橋……、あいつ等は匕首せつて知り合つたんだ……。
？」

あいつらの接点は無いはず……。

もし、あるとしたら俺だな……。

俺がそんなことを考へていると、携帯が鳴つた。

「はい、もしもし……。」

『俺だ』

「土方さん、例の件ですか？」

『例の件って……、沖田から何を聞いた?』

「これといって詳しいことは聞いてないですよ。でも雰囲気で何か
あつたのか分かります……。逃げられたんですよね? 矢橋 洋に……。
・・・

『ハア……、やっぱり感づいてやがったか……。ああ、一か
月前に監視全員、肉片と化していた……。』

今、その調査中だ。それでお前に話が聞きたいんだが・・・、今から近藤さんとそっちに行つていいか?』

「事前に武慎高に連絡してくだされば、恐らく大丈夫かと」

『わかった。そっちに着いたらまた電話する』

『そう言つて、土方さんは電話を切つた。

土方さんは公安〇課の? 2である。

近藤さん、土方さん、沖田さんと知り合つたのは、去年の矢橋が起
こした爆弾事件関係で俺が爆弾解体
に出動した時だ。

あの時も先輩が・・・。

ハツ! いかんいかん・・・。

忘れたい過去だ・・・。

俺はその場を立ち去つた・・・。

1時間後・・・

俺は放送で呼ばれ、
教務科学科塔にある会議室に、近藤さんと土方
さんと共に居た。

マスターズ

「单刀直入に聞くが、お前はなにか奴の情報を知らないか？」

「知つてますよ、土方さん」

「本当か！？ どんな情報だ！？」

「奴が加担してこる組織について……」

俺がそういうと、土方は眼の色を変えた。

「どうこういとだ……？ 奴にはバククがいるひとことなのか……
・？」

「ええ。確かに……イウーっていう組織らしいです」

俺がそういうと、土方は黙りこんだ。

「やつぱり、手出しできない組織ですか？」

「……まあな。奴がイウーに入ったのは、俺達の課と武検から逃げるためと考えて間違はないと思う……」

「なら、俺があいつを殺りますよ……。」の手で……

「お前、ふやけてんのか？ お前はただの武偵になり下がつたんだぞ。まだお前が薬専高の生徒なら考えられたが、今のお前じや……」

「殺らせろよ・・・・あの塵蟲を・・・・」

俺は殺氣を放ち、土方を睨む。

「ハア・・・・、近藤さんの言つた通りになりやがった・・・・

「言つただろ?」イツはあの姫神検事のお孫さんだ。正義感が強い

「祖母は関係ないでしょ・・・・。それより、どうなんですか?」

俺がそう近藤さんに問いかけると、近藤さんはスーツの懐からホールスターに入った自動拳銃（オートマチック）最強の銃・・・・。

デザートイーグル・50AEを取り出し、机に置いた。

「これは?」

「姫神検事が、いざとなつたらお前に渡せと言われていてな。お前なら言いだすと諦つていた」

俺は机のDEを取り、懐のショルダーベルトを取り付けた。

「オートマは苦手なんですがね・・・・

「仕方ないだろ。俺は姫神検事にお前に渡してくれつて言われたから渡しただけだ」

「祖母が自動拳銃を送つて來たつてことは、く氣をつけろ」という意だろう・・・・。

「あと一つ聞きたい、薫。沖田に聞いた話だが、あの監獄に服役していた矢橋以外の囚人、それに監視が何者かに殺されていた・・・。その件で心当たりはあるのか？」

俺は土方さんの問いかけに答えたくはなかつた・・・。

「それはわかりません・・・」

「本当に知らないのか？監視カメラには仮面をした男が居た・・・。もしかしたらお前の知り・・・」

「知らないって言つているでしょ！・・・もう用が済んだんなら帰つてください！・・・私は忙しい！」

俺は自分でもなぜ怒鳴つたのか分からなかつた・・・。

「悪かつたな、薫。でも、もし何か分かつたら・・・もし落ち着いて話せるようになつたら・・・自分が足で来てくれ・・・。あと、矢橋洸の脱獄に加担した奴も、殺つてもかまわないからな・・・」

そう言つて、近藤さんは立ち上がり、土方さんを連れて会議室を出て行つた。

俺は一息ついて、メディシン薬物科の学科塔に向かつた・・・

5弾 An armed a public prosecutor. (後書き)

姫川 淩(年齢不詳)

髪型：黒色のセミロングのストレート

眼色：ダークブルー

身長：160cm B：B70

愛美の実の姉

姫澤 美春(17)

髪型：藍色のショートカット

眼色：サファイアブルー

身長：154cm B：A70

武装：コルト キングコブラー 4in

薫の幼なじみで今はライバル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352z/>

緋弾のアリア～薬物科の武偵～

2011年12月29日22時51分発行